

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

言語的ブリコラージュとしてのフォークロア：
ロシア・フォークロアにおける語源的文彩（figura
etymologica）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2010-02-16 キーワード: 作成者: 伊東, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004499

言語的ブリコラージュとしてのフォークロア
——ロシア・フォークロアにおける語源的
文彩 (figura etymologica)——

伊 東 一 郎*

Folkloristic Text as a Verbal “Bricolage”: Figura
Etymologica in Russian Folklore

Ichiro Ito

This paper analyzes the *figura etymologica*, a syntactic combination of words derived from the same root, which is a characteristic verbal device in Russian Folklore. This device is understood as repetition on the syntactic level, and, more generally, as verbal “bricolage”, a concept introduced by Lévi-Strauss.

On the linguistic level “bricolage” is realized by the poetic function of language as defined by Jakobson, which projects the principle of equivalence from the axis of selection into the axis of combination.

Multiformity of *figura etymologica* in Russian Folklore is explained by the correlation of the above general rule of poetic function and the active capacity of the Russian Language to produce a multitude of derivative words.

I. 序 論

1. フォークロアの構造分析とその諸レベル
2. 語源的文彩 (figura etymologica) の定義
3. figura etymologica と一般的手法としての「反復」
4. 言語活動における二つの軸
5. 言語的ブリコラージュとしての統合—範列関係の転換

II. figura etymologica の類型

1. 文のレベルにおける figura etymologica
 - 1) 並列複文に同語根の語があらわれるもの
 - 2) 同じ語根を含む名詞句と動詞句が主述関係を結ぶもの
2. 句のレベルにおける figura etymologica
 - 1) 動詞句にあらわれる figura etymologica

* 国立民族学博物館第3研究部

- | | |
|----------------------------------|---------------------------------|
| 2) 名詞句にあらわれる figura etymologica | III. figura etymologica の一般的機能 |
| 3) 形容詞句にあらわれる figura etymologica | 1. 情動的機能 |
| 4) 副詞句にあらわれる figura etymologica | 2. 詩的機能 |
| 5) 前置詞句にあらわれる figura etymologica | 3. 記憶術的機能 |
| | 4. 呪術的機能 |
| | 5. figura etymologica の諸機能とジャンル |
| | IV. 結論 |

I. 序 論

1. フォークロアの構造分析とその諸レベル

一般的に言語芸術としてのフォークロアを分析しようとする際には、いくつかの異なるアプローチが可能である。まず基本的に通時的分析と共時的分析の二つの方法があり、これは相補的な概念と言えるが、発生論的・歴史的方法論が優位であった前世紀に対して、今世紀初頭には、言語学、人類学、文芸学などの人文諸科学に、共通して通時論から共時論への転換が見られたことは特徴的である。Saussure, Malinowski, ロシア・フォルマリズムなどの業績とともに、この時期にフォークロアの分析にも共時的・構造的方法があらわれる。Propp の『民話の形態学』[PROPP 1928] はその先駆といえよう。彼は、従来、外見的類似のみを根拠として発生論的解釈がなされたり、借用関係が論じられることの多かったプロット分析に、構造的方法をはじめて適用したといえることができる。Propp は、この著作において、「魔法民話」というジャンルに属するロシア民話の多様なプロットが、最終的には単一の構造的モデル、すなわち単純な論理的 syntax に還元され得ることを示したのであるが、その方法がある意味で Lévi-Strauss による神話の構造分析を先どりするものであったことは、後に Lévi-Strauss 自身が認めているとおりである [LÉVI-STRAUSS 1960]。

ところでプロットが言語の個別性を超えて比較可能な、semantics にのみかかわるレベルであるのに対して、フォークロアの文体論的側面は、必然的にそれぞれの言語の個別性により強く規定される。このため従来このレベルでの研究は、もっぱら言語学者によっておこなわれてきたが、その方法は、やはり多くの場合発生論的・歴史的なものであった。これに対してフォークロアのテキストの文体論的側面に、共時的・機能的観点から光をあてたのは、ロシア・フォルマリズム、とりわけ Jakobson, Šklovskij らの詩的言語研究であった。彼らは詩的言語の形式的側面は、日常的言語の場合とは異なり、意味論的側面と同等の、場合によってはそれ以上の自立的価値を

獲得する、と考えたからである [JAKOBSON 1979; ŠKLOVSKIJ 1919a, 1919b]。この視点からは、従来単なるアルカイズムと解釈されてきたフォークロアの文体論的諸特徴は、韻律やジャンルの特性にかかわる重要な機能をにうものとして捉えかえされる [伊東 1980]。

ところでフォークロアのテキストを分析する際、それが共時的方法か通時的方法であるかにかかわらず、テキストをどのレベルで分節するかによって、その分析の対象は異なってくる。つまりフォークロアのテキストは、プロットのレベル、成句法のレベルをはじめとして、統辞、形態、音韻等の文法的諸レベルから成る階層的構造をなしていると考えられ、それゆえ、これらのいずれのレベルにおいても分析が可能である。たとえば Propp がおこなったようなプロットの分析では、フォークロアのテキストは、プロットの抽象的な構成単位 (Propp は、これを「機能」と呼んでいる) に分節される。Lévi-Strauss は、やはり神話を、音素、形態素、意義素などの構成諸単位から成る階層的構造と捉え、その最上位に「神話素」という概念を提起している [LÉVI-STRAUSS 1958: 232]。また叙事詩などにみられる、既成の定型句のくみあわせによる詩行の構成などが研究の対象になる場合、テキストはこれらの定型句を構成単位として分節されるであろう。Parry および Lord がホメロスおよびセルビア叙事詩についておこなった研究は、このレベルにかかわるものである [LORD 1960]。統辞論のレベルではテキストは語を構成単位として分節され、類音語反復、類義語反復などの手法が分析の対象となる。本稿で検討の対象とする live a life, 「歌を歌う」といった語源的文彩 (figura etymologica) も、このレベルにあらわれる構造といえよう。形態論のレベルでは、テキストは形態素を構成単

レベル	構成単位	分析対象
プロット	モチーフ、機能 (Propp) 神話素 (Lévi-Strauss)	プロットの構造、神話の論理的構造
成句法	(叙事詩などの) 定型句	(叙事詩などにおける) 定型句等のくみあわせによるテキスト構成の構造
統辞論	語	類義語反復、類音語反復、figura etymologica, 「かけことば」
形態論	形態素	形態論的・造語論的な特徴
音韻論	音素 弁別的特徴	韻律の構造、民謡におけるテキストと音楽の相関

図1 フォークロアの構造分析の諸レベル

位として分節され、語の形態論的・造語論的特徴などが分析の対象となろう。ロシアの叙情歌に特徴的な指小接尾辞の頻用を論じた Ossoveckij の論文はこのレベルにおける分析である [Ossoveckij 1957]。さらに音韻論のレベルでは、テキストは音素を構成単位として分節され、押韻、韻律などの構造、民謡におけるテキストと音楽の相関などが研究の対象となる。これらのテキストの諸レベルと、分節される構成単位、分析の対象は、図1のように示すことができよう。

筆者は、既にロシア・フォークロアにおける類義語反復、指小接尾辞の頻用などの問題を個別的に論じてきたが [伊東 1977, 1979, 1980]、それらの問題はいずれも以上のような位置づけにおいて捉えられている。本稿の考察の対象であるロシア・フォークロアにおける語源的文彩 (*figura etymologica*) も、同様の位置づけにおいて、より一般的な問題に関係づけられることになる。

2. 語源的文彩 (*figura etymologica*) の定義

本稿は、ロシア・フォークロアに特徴的な *figura etymologica* を直接の考察の対象とするものであるが、まず術語の定義をおこなっておこう。*figura etymologica* とは、「語源的文彩」とも訳され、同語根の語が語構成のレベルで反復あるいは結合される語法である。たとえば шум шумит 「ざわめきがざわめく」、думу думать 「思いを思う」、горе горькое 「苦い苦しみ」などがそれである（くわしくはⅡ章の用例を見ていただきたい）。狭義の *figura etymologica* は、live a life のように動詞が同語根の名詞を対格補語にとるもの（「内的対格」）のみをさし（上の例では二番目、Ⅱ章の分類では、2-1)-(1)その他の同語根の語の反復 (*paregmenon*) と区別するが [GONDA 1959: 273; RANGE 1976-1977]、ここではこの術語を最広義に用い、狭義の *figura etymologica* と *paregmenon* の双方を含むものとして扱う。狭義の *figura etymologica* は、印欧語においては最も普遍的に見いだされる基本的な語根反復のタイプではあるが、全く異なるタイプの語根反復を他の言語によるフォークロアに見いだすことも稀ではないからである。語根反復という文体論的現象を、歴史的ではなく、機能的側面から類型論的に考察しようとするならば、狭義の *figura etymologica* と *paregmenon* を区別することはむしろ不適當である。

3. *figura etymologica* と一般的手法としての「反復」

figura etymologica を、筆者は類義語反復、類音語反復などと共に、基本的に統辞論のレベルにおける「反復」の手法と捉えたい。この「反復」の手法が、統辞論

のレベルばかりでなく、フォークロアのテキストのいずれのレベルにもあらわれうるものであることは重要である。既に Šklovskij は、kudy-mudy (「どこへ?」) といった音韻反復のための造語と「ローランが三度石を打つ」といったモチーフの反復に類比的な関係を見ていたが [ŠKLOVSKIJ 1916 b], figura etymologica も、より一般的にはこの「反復」の手法の体系の中に組み込まれるであろう。

ところでモチーフの反復という現象、あるいは対句法的な syntax のパラレリズムなどの技法がほとんど普遍的にフォークロアにあらわれ [JAKOBSON 1966], またその方法と類型は異なるにせよ、押韻、より一般的には音韻反復が民謡、叙事詩等のジャンルにはほとんど普遍的にあらわれるのはなぜであろうか。Šklovskij は、ここに文学構成の一般的法則を見るのであるが [ŠKLOVSKIJ 1919b], しかし「反復」が文学だけでなく、美術や音楽の領域においても重要な役割をはたしていることを考えるなら、問題はより一般的に、次のようにたてられるだろう。すなわち芸術の諸ジャンルに、「反復」が基本的な構成の手段としてあらわれるのは何故であろうか。おそらくそこでは「反復」は、時空間的な素材の人間的な組織化と秩序づけの最も基本的な手段として機能しているのである。音楽における反復は、時間の組織化に対して特権的な機能を持っていると考えられるし、民謡や神話における類似のモチーフの反復は、語られる「出来事」にある種の秩序をもたらす。Blacking によれば、ヴェンダにおいて「歌」(u imba) を「話し言葉」(u amba) から区別するものはリズム・パターンの反復であり [BLACKING 1973: 27], また Lévi-Strauss は、神話における類似のエピソードの反復は、神話の構造を明示する機能を持つ、と主張している [LÉVI-STRAUSS 1958: 254]。また Leroi-Gourhan が、先史時代における人間の図示表現が、形を表現した表徴ではなく、まずリズムを表現した表徴から形づくられてくる、と指摘していることは興味深い [LEROI-GOURHAN 1964: 265-266]。

4. 言語活動における二つの軸

ここで figura etymologica をも含めた、統辞論のレベルに見られる反復を、より一般的な視野から考えてみよう。Saussure は言語活動を構成する二つの関係を明らかにし、統合関係 (rapport syntagmatique) と連合関係 (rapport associatif) と名づけた。前者は、一般的に記号素が言連鎖内で結ぶ結合関係であり、後者は現在では rapport paradigmatic (範列関係) という名称でよばれることの方が多いが、ある記号素がなんらかの関連を持つ他の記号素と話線の外で結ぶ関係である。たとえば「私はあなたを愛している」という文においてこの文を構成している言語単位が結

ぶ関係「私=は=あなた=を=愛し=て=いる」は統合関係であり、「私」という単語が「俺」「あたし」「僕」などの代入可能な他の言語単位や、「渡し」「わだち」などの類音語と結ぶ関係は、それぞれ意味論的、音韻論的なレベルでの範列関係である。印欧語においては、単語の屈折によってもたらされる一連の語形が重要な形態論的な範列関係を構成し、狭義の範列関係は、この形態論的な範列関係のみをさすことがある。いずれにしても、統合関係は、そこで記号素が結合される関係、後者は記号素がそこから選択される関係ということができよう。

ところで、類音反復、類義語反復、*figura etymologica* などの手法を考えてみるならば、それらがいずれも互いに範列関係にある語の結合として捉えられることがわかる。たとえばロシア・フォークロアにしばしば合成語的にあらわれる *травы—муравы*「草—若草」という語結合は、類義語反復と類音語反復をかねた語法であるが、通常の言語活動においては選択されるべき関係にある要素が結合されたものということができる。また *горе горькое*「苦い苦しみ」、*думу думать*「思いを思う」といった *figura etymologica* も、一種の同語反復であり、結合されている語は、いずれも選択されるべき関係、すなわち範列関係にあることがわかる。つまりフォークロアにおける反復の手法は、全く同一の要素の反復ではなく、より厳密には差異を伴った反復、すなわち範列関係の統合関係への転移としてあらわれるのである。この原理は、より下位の音韻論のレベルにもあてはまる。たとえば押韻という現象は、範列関係としての音韻論的規則性が統合関係に投影されたものと捉えることができる。また逆により上位のプロットのレベルでの反復も、同様に一種の範列的規則性のプロットへの投影と考えることができる。たとえば民話のプロット構成においてモチーフの反復のためにしばしば用いられるのは、兄弟、姉妹といった親族関係における範列的秩序である。さらに Lévi-Strauss の神話解釈も、後述するように、神話が元来このような統合関係に投影された範列性として構成されていることを前提としているといつてよい。

ところでこのような範列関係の統合軸への投影という一般的原理を、詩的言語の一般的特性として見いだしたのが Jakobson であった。彼は言語の機能を、発話を構成する六つの要因によって六つに分類し、詩的機能を、メッセージそれ自身への言語の志向と規定したうえで「言語の詩的機能は、等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する」という定式を提出したのである [JAKOBSON 1960] が、これは今まで述べてきたフォークロアにおける反復の手法の一般的原理に一致するものである。Ruwet は、音楽における反復の手法をこの公式によって解釈しており [RUWET 1972]、Lévi-Strauss は、神話的思考の本質をこの公式にみいだしている [LÉVI-STRAUSS

1962: 197]。Lévi-Strauss 自身が繰り返し音楽と神話の共通性を強調していることを想起するならば、一般的に、範列関係による統合関係の組織化という方法は、音楽—詩的言語—神話という三つの記号体系を貫く一般原理ということができるかもしれない。音楽においてはこの原理はもっぱら記号の能記の側面にあらわれ、神話においては逆に所記の側面にあらわれるが、詩的言語においてはこの原理は能記と所記の両側面にあらわれることを考えるなら、この三者はシンメトリカルな関係にある記号体系ということができよう。

5. 言語的ブリコラージュとしての統一範列関係の転換

ここで一般的にフォークロアおよび神話の構成に、何故このような統一範列関係の転換という手法があらわれるのか、という問題を考えてみよう。Lévi-Strauss は、神話的思考の本質を、既存の諸記号の再構成、すなわち要素の更新ではなく関係の変換に見ており、それをありあわせの材料を用いておこなわれる bricolage (器用仕事) にたとえている [LÉVI-STRAUSS 1962: 26-47]。ところでここでフォークロアのテキスト構成の方法を考えてみるならば、これも言語的レヴェルでの一種のブリコラージュである、ということができよう。フォークロアの場合も、個人的創作とは異なり、全く新しい造語や新しい表現を無から創造することは不可能であり、創作行為の場において既存の語や表現の組合せによってテキストを構成していかなければならないからである。この時に要素の更新ではなく、関係の変換によって新しい表現を生みだそうとするならば、様々なレヴェルの記号素間に変換されるべき関係として普遍的に存在するのは、既に述べた統一範列という直交する二つの軸である。すなわちこの二つの関係の(おそらくは無意識的な)変換が、言語的なレヴェルでのブリコラージュの基本的な方法とならざるをえない。この視点は既に Lévi-Strauss 自身によって示唆されている [LÉVI-STRAUSS 1962: 198]。

このように見てくるならば、プロットの反復や対句法的な syntax のパラレリズムが、言語系統を問わず、フォークロアにかなり普遍的に見られるのは、範列関係の統合関係への転移というこの原理が、プロットや統辞論のレヴェルでは、言語の個性に拘束されることなくあらわれやすいからである、と考えられる。

これに対してより下位のレヴェルでは、この原理の具体化は様々な形をとりうるであろう。たとえばわが国の詩歌に伝統的な「かけことば」の技法も、同音異義語の重ねあわせという点から見るなら、やはり範列関係の統合関係への転移と捉えることができるが、この技法が、同音異義語を多く持つ、という日本語そのものの言語的構造

に由来することは明らかであろう。同様に言語の音韻論的構造は韻律の構造を強く規定するはずである。Jakobson は、同じスラヴ語ではあっても音韻の構造が大きく異なるロシア語とチェコ語が、その韻律の構造においても対応する違いを示していることを論じている [JAKOBSON 1923] が、他方語頭にアクセントを持つ古代ゲルマン語とフィンランド語がともに詩においては頭韻を踏む、という類型論的一致も見いだされるのである。

ここで本稿の考察対象である *figura etymologica* にもどるならば、この語法が利用するのはもっぱら形態論的な範列関係であり、それゆえ当該の言語体系に多様な形態論的な範列関係を潜在させている言語にこの語法があらわれやすい、ということが言えよう。印欧語においてこの条件を満たすのは、現代語では屈折性の強いスラヴ語派とバルト語派であり、この語法はロシア・フォークロアのみならず、他のスラヴ・フォークロアやバルト・フォークロアにもあらわれる。また屈折性の強いギリシャ語、ラテン語、サンスクリット語、ヴェーダ語などの古代印欧語において *figura etymologica* は重要な文体論的技法として発達している [IVANOV 1969]。これらの言語にあらわれる *figura etymologica* には、ロシア・フォークロアに見られるものと類型論的に(場合によっては歴史的にも)一致するものが少なくないのは当然であるが、この語法の存在そのものは、影響関係によっては説明できない。*figura etymologica* を詩的語法として用いるのは屈折的な印欧語ばかりではない。膠着的なフィン=ウゴル諸語のフォークロアにもこの手法は広汎に用いられている [AUSTERLITZ 1958: 108-114; LAGERCRANTZ 1963: 184; STEINITZ 1976: 41-46]。この平行的な現象は、影響関係ではなく、むしろ手法としての *figura etymologica* の背後にある「範列-統合軸の転換」という原理の普遍性を物語るものといえよう。たとえばフィン=ウゴル系のフォークロアにあらわれる *figura etymologica* の構成は、同じ語根反復と言っても印欧語のそれとは全く異なるものが多く、影響関係で説明することは不可能である。例をあげるなら、オスチャーク・フォークロアにおいて有力な *figura etymologica* のタイプは、所有を示す接尾辞 *-əŋ* を用いて構成されている。

xūjəŋ ruš xū [STEINITZ 1976: 42]

「男のロシア人の男」

patəŋ xōp patet [STEINITZ 1976: 42]

「底のある小舟の底」

wēt tujpə tujəŋ kur [STEINITZ 1976: 42]

「五本の指の、指のある足」

本稿は、以上のように *figura etymologica* を範列—統合軸の転換という原理のひとつの具体的なあらわれと捉えるものであり、その諸類型を提示することによって、この仮説を確認しようとするものである。

II. *figura etymologica* の類型

ロシア・フォークロアにおける *figura etymologica* の手法はきわめて多様であり、様々な類型を作りだしている。本稿ではこれらの手法を便宜的に大きく二つに分類する。すなわち文のレベルにあらわれるものと、句のレベルにあらわれるものである。そのそれぞれは、さらにいくつかの下位レベルの類型に分けられるが、分類そのものに大きな理論的意味はない。目的はロシア・フォークロアにおける *figura etymologica* 形成の文法的手段の多様性を示すことと、他の諸言語における平行的な例との比較を可能にすることである。

1. 文のレベルにおける *figura etymologica*

1) 並列複文に同語根の語があらわれるもの

例 1 *Есть и орало, да нечего орать.* [КРАУЦОВ 1971: 68]

「鋤はあっても耕すものがない」(諺)

例 2 *Взял топор—возьми и топориче.* [DAL' 1862: 134]

「斧をとるなら、斧の柄もとれ」(諺)

例 3 *Подумаешь—горе; а раздумаешь—власть Господня.* [DAL' 1862: 140]

「ちょっと考えれば不幸だが、よく考えれば神様の御心」(諺)

例 4 *Невинно вино, а виновато пьянство.* [DAL' 1862: 890]

「酒が悪いんじゃない、酔っばらうのが悪いんだ」(諺)

例 5 *Дома нет, домовице будет.* [DAL' 1862: 293]

「家はなくても植はできる」(諺)

2) 同じ語根を含む名詞句と動詞句が主述関係を結ぶもの

(1) 同語根の名詞と動詞が結合するもの

例 6 *Скоро сказка сказывается, да не скоро дело делается.* [ŽUKOV 1966: 419]

「物語はすぐに語れるけれど、仕事はすぐにはかたづかない」(諺)

- 例7 *Звонили звоны* в Новгороде…… [門馬 1959: 116]
 「ノヴゴロドに(鐘)音が響いた……」(叙情歌)
- 例8 Что не золотая *трубушка* *вострубила*…… [KRAVCOV 1971: 249]
 「黄金のラッパが鳴り響いたのではなく……」(歴史歌謡)

同様の語法は12世紀の古代ロシア叙事詩『イーゴリ軍記』(Слово о пълку Игоревъ)に既にあらわれている。

- трубы* *трубятъ* въ Новѣ-градѣ…… [ČIŽEVSKA 1966: 354]
 「ノヴゴロドにラッパは響きわたり……」
- 例9 Не *пыль* в поле *пылит*…… [KRAVCOV 1971: 254]
 「野原にはほこりが立っているのではない……」(歴史歌謡)
- 例10 *Воин* *воюет*, а жена *горюет*. [KRAVCOV 1971: 66]
 「戦士は戦い, 妻は悲しむ」(諺)
- 例11 Ай не шум шумит, не гром *гремит*…… [ASTACHOVA 1951: 636]
 「ああ, ざわめきがざわめいているのでも, どよめきがどよめいているのでもない……」(叙事詩)
- 例12 *Сват*-от *сватался*, да порасхвастался…… [PROPP 1961: 253]
 「仲人が媒酌して自分で自慢した……」(叙情歌)
- 例13 *Бегут* *бегунчики*, *ревут* *ревунчики*…… [JAKOBSON 1979: 331]
 「走り屋が走り, 叫び屋が叫ぶ……」(謎々)
- 例14 Хорошо *гребцы* *гребут*…… [KRAVCOV 1971: 256]
 「上手にこぎ手たちはこぐ……」(歴史歌謡)
- 例15 Из небес же тут добрынюшки да *глас* *гласит*…… [KRAVCOV 1971: 163]
 「するとそこで空からドブリニャに声が語る……」(叙事詩)
- 例16 *Вор* *ворует*, а мир *горюет*. [ŽUKOV 1966: 86]
 「どろぼうが盗めば, 世間は苦しむ」(諺)
- 例17 *Цари* да *царствуют* по *царствам*…… [EVGEN'EVA 1963: 118]
 「皇帝たちは王国をおさめている……」(叙事詩)

例18 *Кузнец в кузнице куёт……* [EVGEN'EVA 1963: 118]

「鍛冶屋は鍛冶場で鍛えている……」(叙事詩)

ウクライナ民謡にも同様の構文が見られる。

Коваль кує, заліза немає [Vovčok 1979: 179]

「鍛冶屋は鍛えるけれども、鉄がない……」

リトアニア民謡にも同様の構文が見られる。

Ant tos šakelės kalveliai kala…… [ČIURLIONYTĖ 1955: 420]

「その小枝の上で鍛冶屋が鍛える……」

例19 *Еще день за день ведь как и дождь дождит……* [EVGEN'EVA 1963: 121]

「さらに雨が降るのように日一日と過ぎてゆき……」(叙事詩)

この語法は現代ロシア語では普通用いられず、*дождь идёт* のように動詞 *идти* を用いるか、*дождить* のみを無人称的に用いるのが普通である。これに相当するリトアニア語の *lietus lyja* は口語で用いられ、民謡においても次のような例が見られる。

Oi lyja lietus per pačius pietus…… [ČIURLIONYTĖ 1955: 237]

「おお、ちょうど正午に雨が降る……」

例20 *что с вечера пороша порошила……* [EVGEN'EVA 1963: 124]

「晩から初雪が降った……」(叙情歌)

例21 *На дворе уж свет светает……* [EVGEN'EVA 1963: 127]

「家の外にはもう(朝の)光がさして……」(叙情歌)

дождь дождит (雨が降る)と同様、*свет светает* (朝の光がさす)は、ニュートラルな発話状況では用いられず、動詞のみを無人称的に用いて表現されるのが普通である。

例22 *Заря заревала, по церкви ходила, ключи обронила……* [EVGEN'EVA 1963: 125]

「朝焼けが燃えあがり、教会を歩きまわり、鍵をおとした……」(謎々)
(答——「露」)

同様の構文はブルガリア民謡にも見いだされる。

1961: 99]

「私たちは刈り取った、刈り取った、刈り取った、収穫した——若い刈取人
(の私たち) は……」(収穫の儀礼歌)

同様の語法は、ウクライナおよびチェコ民謡にも見られる。

Ой на горі та жєнци жнуть…… [PRAVDJUKA 1964: 20]

「おお丘の上では刈手たちが刈る……」

Zažínaj, zažínaj, budeš dobrá žníca…… [KRAVCOV 1976: 59]

「刈り取れ、刈り取れ、おまえはよい刈手になるだろう……」

同様の語法は、リトアニア民謡にも見られる。

Piovė piovė, Piovė piovė piovėjėlės…… [ČIURLIONYTĖ 1955: 113]

「刈った、刈った、刈り手たちは刈った、刈り取りました……」

(2) 動詞の主語が同語根の形容詞によって修飾されるもの

例27 Светит светел месяц…… [IVANOV 1953: 342]

「明るい月が輝く……」(叙情歌)

例28 черная лодочка она зачернелася…… [EVGEN'EVA 1963: 131]

「黒い小舟が黒みだした……」(叙情歌)

例29 Не белы снеги в поле забелелися…… [KRAVCOV 1971: 250]

「白い雪が野に白みはじめたのではない……」(歴史歌謡)

ウクライナ民謡にも同様の語法が見いだされる。

Та забілили сніги, Забілили білі…… [PRAVDJUKA 1964: 29]

「雪が白みはじめた、白い(雪が)白みはじめた……」

例30 Сиротать будут сиротны малы детушки…… [EVGEN'EVA 1963: 136]

「親のない小さな子供たちは孤児となるだろう……」(泣き歌)

次の例のように、主語がさらに同語根の形容詞によって修飾されている例も見いだすことができる。

例31 А не темные ли темени затемнели…… [EVGEN'EVA 1963: 245]

「暗い闇が暗くなったのではない……」(叙事詩)

例32 Не черная черница зачернелася…… [PROPP 1961: 459]

「黒いコケモモが黒く見えてきたのではない……」(叙情歌)

(3) 名詞が同語根の動詞の受動分詞と結合するもの
 サンスクリットに *taryate tarah* 「苦行が修せられる」などの例が見られるが、ロシア・フォークロアにもしばしば見いだされる。

例33 *Распахана шведская пашня*…… [KRAVCOV 1971: 252]

「スウェーデンの耕地はすっかり耕やされた……」(歴史歌謡)

再帰動詞を用いたこのタイプの *figura etymologica* は、次に述べる同語根の動詞と対格補語によって構成される *figura etymologica* を変形したものといえる。上にあげた例は、たとえば *Распаху ль я пашенку*…… 「私は耕地を耕そう……」(叙情歌) [DAL' 1882: 25] のタイプの *figura etymologica* を受動分詞によって受動文に変形したものである。

2. 句のレベルにおける *figura etymologica*

1) 動詞句にあらわれる *figura etymologica*

(1) 同語根の動詞と対格補語によって構成される *figura etymologica*

これは動詞がいわゆる内的対格とよばれる同族目的語 (*cognate object*) と結合する語法で、印欧語一般にきわめて広く見いだされる。ロシア・フォークロアにおけるこのタイプの *figura etymologica* は、現在でも他のスラヴ語、およびバルト語のフォークロアに多くの並行的な例を持っており、歴史的には印欧語そのものの統辞論の構造に由来すると考えられる。例えばヒッタイト語 *kupiyatin kup-* (「計画を計画する」)、ギリシャ語 *μάχην μάχεσθαι* (「戦闘を闘う」) の例のように、この語法は古代印欧語にはしばしば見られた [高津 1954: 202; GONDA 1959: 273-284; 辻 1974: 269]。上述のように狭義の *figura etymologica* は、このタイプの構文のみをさすが、口承文芸における詩的手法の一般的体系の中で、この語法をとらえようとする時には、この定義は不適當なものに思われる。詩的手法としての語根反復は印欧語のフォークロアにのみ見られるものではないからである。

例34 *жизнь прожить* — не поле перейти. [ŽUKOV 1966: 149]

「一生を生きることは畑を横切るようにはいかぬ」(諺)

同様の構文はラテン語の *vitam vivere* をはじめ印欧語だけでなく、ハンガリー語の *életet élni* などフィン=ウゴル諸語にも広く認められる [Fokos 1932: 70-71]。

例35 *Колыбель колышат*…… [KRAVCOV 1971: 261]

「彼らはゆりかごをゆする……」(バラード)

例36 Я с полуночи, горюша, *думу думаю*…… [KRAVCOV 1971: 44]

「不幸な私は真夜中から思いを思う……」(泣き歌)

このタイプの構文は古代ロシア語にも既にあらわれている。

……, злу *думу думающихъ*. [SREZNEVSKIJ 1893: 743]

「……悪しき思いを思う者たちを」

古代ロシア語ではこの構文は、主語が造格補語 *думою* をとるのがより一般的であった [SREZNEVSKIJ 1893: 743]。またロシア・フォークロアにおいても造格補語 *думою* を用いた構文は、ここにあげた対格補語 *думу* を用いた構文と並行して見いだされる (2-1)-(2)参照)。

同様の構文はまたリトアニアおよびラトビア民謡にもあらわれる。

Dūmelē dūtojau…… [RANGE 1977: 287]

「私はささやかな思いを思った……」

Vienas duomas duomājam…… [ENDZELĪNS 1951: 577]

「私たちは同じ思いを思っている……」

ラトビア語の *duoma*, リトアニア語の *dūma* は、スラヴ語 **duma* からの借用語と推定されている [FASMER 1964: 552] が、この構文そのものは借用ではなく、おそらく類型論的一致であろう。

例37 Суды рассуживает, и ряды разряживает…… [KRAVCOV 1971: 232]

「裁きをよくよく裁き, ことをあれこれ決めて……」(歴史歌謡)

同様の語法は古代ロシア語にも既に見ることができる。

……, нъ праведнын *судъ судите*. [SREZNEVSKIJ 1906: 598]

「……だが、正しい裁きを裁け。」

さらに他の印欧語においても、古代アイルランド語 *berid breth*, ヒッタイト語 *ḫaneššar hanna-* (Kronasser によればセム語族のアッカド語 *dīnam dānu* の借用) 等の語法 (いずれも意味は「裁きを裁く」) の例が報告されている [IVANOV 1969: 43-44]。

例38 *мостиат* они *мости* калиновы [KRAVCOV 1971: 197]

「彼らはカリーナの橋をかける……」(叙事詩)

ウクライナ民謡にも同様の構文が見いだされる。

через ті річки *мостиать мости*, *мостиать мости* да всі головками
…… [МАКСИМОВИЧ 1834: 116]

「彼らはその川に橋をかける、川という川に人の頭で橋をかける……」

同様の表現は『イーゴリ軍記』に既に見いだされる。

начаяща мосты мостити…… [ČIŽEVSKA 1966: 210]

「彼らは橋をかけはじめた……」

例39 да й дарите ёму дары драгоценные [KRAVCOV 1971: 173]

「そして彼に高価な贈り物を贈るがいい」(叙事詩)

同様の表現はリトアニア民謡にも見いだされる。

Ir dovanėles Jam dovanosiu [RANGE 1977: 283]

「そしてささやかな贈り物を私は彼に贈りましよう」

例40 Казаки-то им Загадку загадали [KRAVCOV 1971: 84]

「そのコサックたちは彼らに謎をかけた」(叙情歌)

リトアニア民謡に同様の表現が見いだされる。

Užminsiu tau mįslelę [RANGE 1977: 286]

「おまえに小さな謎をかけてやろう」

例41 Ежели ты сослужишь мне службу…… [KRAVCOV 1971: 119]

「もしもおまえが私のつとめをつとめてくれるなら……」(民話)

例42 две ночи в шатрах ночевал…… [KRAVCOV 1971: 111]

「二晩を天幕の中ですごした……」(民話)

ウクライナ民謡、白ロシア民謡にも次のような並行的な語法が見いだせる。

Ночуй, ночуй, мій миленький, Вдома ніченьку одну…… [PRAVDJUKA 1964: 156]

「すごしなさい、すごしなさい、私のいとしい人よ、家で一晩を……」

цёмна ночка, пара спаць, Нет з кім ночкі начаваць. [ČIŠČANKI 1978: 95]

「暗い夜、眠りにつく時だ。でも共に夜をすごす人がいない」

同様の表現は、既に古代ロシア語にも見いだされる。

три нощи ночеваша въ нѣмецкой земли…… [SREZNEVSKIJ 1902: 469]

「彼らは三晩をゲルマンの地ですごした……」

このような並行例から、この語法は東スラヴ・フォークロアに共通のものであることがわかるが、南スラヴにおいてもセルビア叙事詩に次のような例が見いだされる。

дан данили, дв'е ноћи ноћили…… [MIKLOŠIĆ 1895: 15]

「彼らは一日をすごし, 二晩を重ねた……」

例43 Как зиму зимовать? Как лето летовать? [KRAVCOV 1971: 82]

「どうやって冬をすごそうか?, どうやって夏をすごそうか?」(謎々)

セルビア叙事詩に次のような並行例が見られる。

Ми гдје ћемо зимовати зиму [MIKLOŠIĆ 1895: 15]

「我らはどこで冬をすごそうか」

例44 Не мог бы раб божий с работой божией ни думы подумать, ни мысли помыслить, ни взгляд взглянуть, ни беседы беседовать.

[KRAVCOV 1971: 57]

「神のしもべは神のしもべと思いを思うことも, 考えを考へることも, まなざしをまなざすことも, 語らいを語ることもできぬであろう」(恋情を断ち切る呪文)

同様の語法が再びセルビア叙事詩に見出せる。

Мисли мисли, све на једно смисли…… [MIKLOŠIĆ 1895: 15]

「考えを考へ, いつも同じことを思うだろう……」

例45 Лучше того песни поют, Разговоры говорят…… [KRAVCOV 1971: 256]

「それよりも上手に歌を歌い, 語らいを語っている……」(歴史歌謡)

петь песню と同様の表現はリトアニア民謡にも見いだせる。

Aš liūdnas dainavau dainales [RANGE 1977: 282]

「私は悲しい歌を歌った……」

例46 Мы напишем промез собой записи великии…… [KRAVCOV 1971: 192]

「我らはお互いに大いなる文書を書きかわそう……」(叙事詩)

例47 А стреляла я стрелочку каленую…… [EVGEN'EVA 1963: 148]

「そして私は鋼の矢を射た……」(叙事詩)

例48 *Посылает-то собака Калин царь посланника*…… [EVGEN'EVA 1963: 149]

「犬のカルン王はつかいをつかわした……」(叙事詩)

例49 Я вам *сказки скажу*…… [EVGEN'EVA 1963: 158]

「私はおまえたちにはなしをはなそう」(叙事詩)

グレベン・コサックの民謡に取材したレー尔蒙トフ (Lermontov 1814-1841) の詩「コサックの子守歌」《Казачья колыбельная песня》に同様の構文が見られる。

Стану *сказывать я сказки*……

「私はおはなしをはなしてあげることにしましょう……」

例50 А и *веру веруешь ты бусурманскую*…… [EVGEN'EVA 1963: 161]

「だがおまえは異教の信仰を信じている……」(叙事詩)

次の例のように、対格補語がさらに同語根の形容詞によって修飾されている例も見い出すことができる。

例51 *Возгремели они громы громкие*…… [EVGEN'EVA 1963: 245]

「彼らはとどろくとどろきをとどろかせた……」(叙情歌)

例52 Да ты *делай дело повеленое*…… [EVGEN'EVA 1963: 166]

「おまえは命じられた仕事をするがよい」(叙事詩)

例53 Вы *работайте* крестьянскую *работушку*…… [KRAVCOV 1971: 46]

「おまえたちは農夫の仕事をするがいい……」(泣き歌)

同様の表現は、リトアニア民謡にも見られる。

Dirbau darbelį be poilsėlio…… [RANGE 1976-1977: 282]

「私は休みなく仕事をした……」

санскритにも同様の語法が見いだされる。

sarvaṁ kāraṁ akāraṁ [辻 1974: 269]

「私はすべての仕事をした」

オスチャーク・フォークロアにも同様の語法が見られる。

kāšəŋ xū luw wēr! wēr! [STEINITZ 1976: 45]

「すべての男が仕事をする」

例54 Поехали пировать, а пришлось *горе горевать*. [EVGEN'EVA 1963: 167]

「酒盛りにでかけたら、不幸を嘆く羽目になった」(諺)

同様の語法はリトアニア、ラトビア民謡にも見られる。

Kuris papratēs *Vargelī vargti*, Iš mažūju dienelių Ant svetimų rankelių.
[ČIURLIONYTĖ 1955: 165]

「悲しみを嘆くのに、慣れている人は、小さい頃から、他人の中」

bēdā manu bēdu! [ENDZELĪNS 1951: 577]

「私の悲しみを嘆いてくれ!」

(2) 同語根の動詞と造格補語によって構成される figura etymologica

このタイプの構文は、他の印欧語においては、対格補語を用いた figura etymologica ほどは見出されないが、たとえばギリシャ語においては、与格を具格的に用いた次のような構文がそれに相当するといえる。

ἀπώλετο λυγρῶ δλέθρῳ [高津 1960: 281]

「呪わしい破滅で破滅した」(ホメーロス『オデュッセイアー』, 3-87)

なお教会スラヴ語の新約聖書の翻訳においては、このタイプのギリシャ語の figura etymologica は、造格補語を用いて表現されるのが普通である。たとえば Ostromir 福音書においては次のような対応が見られる。

НАЗНАМЕНАНА, КОИѢЖ СЪМЪРЪТНѢЖ ХОТѢКАШЕ ОУМРѢТИ. : ποιῶ θανάτῳ ἡμελλεν
ἀποθνήσκειν

「どのような死で死ぬことを望むかを示そうとして」(ヨハネによる福音書 18章32節)

例55 Оба брата *спят* крепким *сном*…… [KRAVCOV 1971: 101]

「2人の兄弟は、深い眠りを眠っている……」(民話)

リトアニア民謡は、同様の同義語反復を対格補語を用いた語法 (2-1)-(1)) で表現している。

Naktį miegą miegojau [RANGE 1976-1977: 286]

「夜に私は眠りを眠った」

例56 сам *свистнул* молодецким *посвистом*…… [KRAVCOV 1971: 49]

「彼は自分で若者らしい口笛を吹いた……」(叙情歌)

例57 Русской коски *слухом* было не *слыхать* и *видом* не *видать*.
[KRAVCOV 1971: 99]

「ロシア人の骨は耳に聞いたことも、目に見たこともない」(民話)

例58 *Ходит* дом *ходуном* На столбе золотом. [KRAVCOV 1971: 81]

「黄金の柱の上で、家がゆらゆら動いている」(謎々)(答——「ライ麦」)

例59 *полоном-то* *заполнили*…… [KRAVCOV 1971: 29]

「彼らは(私を)とりこにとらえた……」(花嫁の泣き歌)

例60 Не смел-то я *думушкой* *подумать*, Не смел-то я *мыслями* *помыслити*…… [EVGEN'EVA 1963: 181]

「思いを思うこともできず、考えを考えることもできなかった……」(叙情歌)

既に述べたように、語根 *дум-*、*мысль-* を用いた *figura etymologica* は、古代ロシア語においてはこの例のように、造格補語を用いて形成されるほうが普通であった。『イーゴリ軍記』における次の例は、同じ二つの語根を同様の構文に用いている。

Уже намъ своихъ милыхъ ладъ ни *мыслию* *съмыслити*, ни *думую* *сздумати*…… [ŠIŽEVSKA 1966: 136]

「すでに我らはおのがいとしい妻を思いで思い、考えで考えることもできぬ……」

例61 *Подарил* их *подарками* великими…… [EVGEN'EVA 1963: 183]

「彼らに(ウラジーミルは)たくさんのほうびをやった……」(叙事詩)

例62 А не знаю, где Чурила и *житьем* *живет*…… [EVGEN'EVA 1963: 186]

「だが知らないのだ、どこでチュリーラがくらしをいとなんでいるのかを……」(叙事詩)

例63 Самы *ревом* *ревут* да богатырским…… [EVGEN'EVA 1963: 186]

「彼らは自ら豪傑のおたけびをあげる……」(叙事詩)

(3) 動詞の補語を同語根の形容詞が修飾するもの

例64 *Обсиротило* *сиротных* малых детишек…… [KRAVCOV 1971: 39]

「親のない小さな子供たちは孤児となった……」(泣き歌)

(4) 動詞を同語根の前置詞句が副詞的に修飾するもの

例65 Ермак говорит, как *в трубу трубит*…… [KRAVCOV 1971: 242]
「エルマークはラッパを吹くような声で語る……」(歴史歌謡)

例66 Нам *на встрече* да не *встречатися*…… [EVGEN'EVA 1963: 210]
「我らは出会いで出会うこともできぬ……」(叙情歌)

例67 Я сама *в гости* *гостила*…… [EVGEN'EVA 1963: 206]
「私は自分からお客に行ったわ……」(叙情歌)

(5) 動詞を同語根の副詞が修飾するもの

i 動詞が、同じ語根から接頭辞によって派生した副詞と結合するもの

例68 *Напился* Василий Буслаевич *допьяна*…… [KRAVCOV 1971: 206]
「ワシーレイ・ブスラエヴィチは酔っ払うほどに酔いつぶれた……」(叙事詩)

例69 *и навстречу* бы не *встречались*…… [KRAVCOV 1971: 57]
「そして(二人が)ゆきあってであうことはなからう……」(恋情を断ち切る呪文)

ii 動詞が、同語根の形容詞から派生した副詞と結合するもの

例70 Я *бело* ли *набелилася*…… [EVGEN'EVA 1963: 224]
「私は白くおしろいをぬった……」(叙情歌)

例71 *Звонко звонят* в Новгороде…… [EVGEN'EVA 1963: 225]
「ノヴゴロドで高らかに(鐘の)音が響く……」(叙情歌)

iii 動詞が同じ語根から接尾辞 *-мя(-ма)* によって派生した副詞と結合するもの

この接尾辞は、古い双数形造格語尾に由来するものと考えられるが、もっぱら同語根の動詞を修飾するためにのみ用いられる。

例72 Он *сидел* *сидма* ровно тридцать лет…… [EVGEN'EVA 1963: 198]
「彼(イワン雷帝)はちょうど30年の間(王座に)すわりにすわっていた……」(歴史歌謡)

例73 И велел грабницу делать каменную, Чтобы двум человеком *сидма*

сидеть, И лежма лежать, и стойма стоять. [EVGEN'EVA 1963: 198]

「そして石の墓を作るよう命じた、二人の男がどのようにもすわり、横にな
り立つことができるような墓を」(叙事詩)

例74 Выпал частый дождик, *Ливня льет*, поливает…… [EVGEN'EVA 1963: 198]

「細かい雨が降ってきた、ざあざあ降って降りそそぐ……」(叙情歌)

このタイプの *figura etymologica* は、口語でも強調のためにしばしば用いられる [EVGEN'EVA 1963: 198]。

iv 動詞がその動詞から派生した副動詞と結合するもの

例75 Не может Владимир *стоючи стоять*…… [EVGEN'EVA 1963: 200]

「ウラジーミルは立ちに立ちつくすことはできず……」(叙事詩)

例76 Не то *стоя простоять*, не то *сидя просидеть*, Не то *лежа пролежать.* [DAL' 1862: 493]

「立ちつくすのでもすわりとおすのでも寝たきりでいるのでもない」(諺)

例77 Я бы *летяци* дорожку *пролетела* бы…… [EVGEN'EVA 1963: 200]

「私は道を飛びつつ飛びわたるでしょうに……」(泣き歌)

(6) 同語根の動詞が反復されるもの

i 不完了体の単純動詞と、この単純動詞から接頭辞と接尾辞によって派生した不完了体動詞が結合あるいは並置されるもの

例78 *Хулила* его, *охуливала*…… [KRAVCOV 1971: 262]

「彼女は彼をけなした、悪く言った……」(バラード)

例79 Стал *шутить* он, *пошучивать* [KRAVCOV 1971: 205]

「彼はふざけた、冗談を言いだした……」(叙事詩)

例80 и стали все *жить-поживать*, добро *наживать*…… [KRAVCOV 1971: 101]

「そしてみんな末長く暮らし、たくさんお金をもうけるようになりました……」(民話)

例81 *Кипит-перекипает, Горит-перегорает, Сохнет-посыхает*

[BOGATYREV 1966: 48]

「わきたち, わきあがり, 燃えたち, 燃えあがり, かわき, かわききる。」
(恋情を催させる呪文)

例82 Она *хвалится, Выхваляется*, Что все видала…… [KRAVCOV 1971: 83]

「彼女はすべてを見たと自慢し, 得意がる……」(謎々)(答——「死」)

- ii 不完了体の単純動詞とこの単純動詞から接頭辞によって派生した完了体動詞が結合あるいは並置されるもの

例83 Еще *шли-прошли* солдаты новобраны…… [KRAVCOV 1971: 252]

「さらに新兵たちが通った, 通りすぎた……」(歴史歌謡)

白ロシア民謡にも同様の語法が見いだされる。

例84 *Ішли, прайшли* Валачэбнічкі…… [BARTASEVIČ and SALAVEJ (ed.) 1980: 59]

「ヴァラチェブニク [儀礼歌の歌い手] たちが通った, 通りすぎた……」

例85 Они *ждали-подждали* губернатора…… [KRAVCOV 1971: 248]

「彼らは県知事を待った, 待ちうけた……」(歴史歌謡)

例86 *Плавает-поплавает* сер селезнь…… [KRAVCOV 1971: 211]

「灰色の雄鴨が泳ぐ, 泳いでいく……」(叙事詩)

動詞組織において同様の完了体の派生をおこなうリトアニア語は、フォークロアにおいても同じタイプの *figura etymologica* を構成する。

Oi kas man tvorelę *Laužė palauze, Žalią diemedelį Graužė pagraužė?*
[ČIURLIONYTĖ 1955: 415]

「おお、誰が私の垣をこわしたの, ぶちこわしたの?, 緑の神の木をかじったの, かじりとったの?」

- iii 完了体の単純動詞とこの単純動詞から接尾辞によって派生した不完了体動詞が結合あるいは並置されるもの

例87 Ах, ты *прости-прощай*…… [PROPP 1961: 142]

「おお、あなた、さようなら, ごきげんよう……」(叙情歌)

以上 ii, iii の *figura etymologica* は、文法的には、いずれも完了体—不完了体という範列的な二項対立が結合軸へ投影されたものといえることができる。

- iv 同語根の異なる形態の完了体動詞から派生した不完了体動詞が結合あるいは並置されるもの

例88 ……, *ограждает* и *огораживает* от серыя черви…… [Тороков 1969: 27]

「……灰色の虫からまもり, 防ぐ……」(虫よけの呪文)

この例では, *оградить* は、充音性 (полногласие) を示さない完了体 *оградить* から派生し, *огораживать* は、充音性を示す完了体 *огородить* から派生している。

2) 名詞句にあらわれる *figura etymologica*

- (1) 同語根の名詞と形容詞が結合されるもの

例89 *хлебы хлебисты, ярицы яристы, пшеницы пшенисты*……

[Афанас'ев 1914: 238]

「穀物たっぷりの穀物, 春麦たっぷりの春麦, 小麦たっぷりの小麦を……」
(民話)

語根反復が自己目的化されているこの例は、意味論的にはほとんどナンセンスだが、名詞と結合されている形容詞は、すべて同一の接尾辞 *-ист-* (「～を豊富に持つ」の意味の形容詞を派生する) によって派生されている。すなわち語根だけでなく、接尾辞も反復される結果となっている。

例90 Гряньте же, *громы громкие*…… [Евген'ева 1963: 233]

「ひびきわたれ, とどろくとどろきよ……」(叙情歌)

例91 ……, целый воз навалил *всякой всячины*…… [Кравцов 1971: 126]

「……荷車いっぱいにあらゆるすべてを積みあげた……」(民話)

例92 *Молодым молодушкам*—По детенышку, *Старым старушкам*

По рублевику…… [Кравцов 1971: 17]

「若い若奥さんには赤ちゃんを一人ずつ, 年とったおばあさんには1ルーブリずつ……」(迎春の儀礼歌)

例93 Ты *молоденький молодчик молодой!* [Пропп 1961: 132]

「おまえ, うら若い, 若い若者よ!」(叙情歌)

例94 …… , посадите в него *тоску тоскучую, сухоту сухотучую*……

[ТОРОРОВ 1969: 35]

「……その中に哀しい哀しみ, こがれる思いを注ぎこめ……」(恋情を催させる呪文)

(2) 前置詞句が同語根の形容詞と並列されるもの

例95 *С Руси русская Полоняночка*…… [КРАВЦОВ 1971: 261]

「ロシアからのロシア人のとらわれの女……」(バラード)

(3) 同語根の名詞が反復されるもの

i 接尾辞を用いた反復

例96 *Заводи, братец, пир-пированьице*…… [КРАВЦОВ 1971: 262]

「兄さん, 宴会を, うたげをひらいてください……」(バラード)

ii 接頭辞を用いた反復

例97 *И думает женка умом-разумом*…… [КРАВЦОВ 1971: 259]

「そこでおかみさんは知恵を, 頭をしぼって考える……」(バラード)

例98 *Горе-горемыка, хуже лапотного лыка.* [DAL' 1862: 133]

「不幸な不幸者, わらじの紐よりまだ細い」(諺)

例99 *Цветы мои цветики*…… [КРАВЦОВ 1971: 28]

「私の花よ, 小さな花よ……」(婚礼の儀礼歌)

例100 *Ой ты зимушка-зима*…… [ПРОП 1961: 123]

「おおおまえ, 冬よ, 冬よ……」(叙情歌)

3) 形容詞句にあらわれる *figura etymologica*

(1) 接尾辞を用いた反復

例101 *Молодым я молодешенька, И глупым-то я глупешенька*……

[ЕВГЕН'ЕВА 1963: 218]

「私は若くうら若くそして愚かで馬鹿な女……」(叙情歌)

例102 *Рада бы, радым-радешенька*…… [ПРОП 1961: 171]

「私はうれしく, 心楽しいことでしょう……」(叙情歌)

(2) 接頭辞を用いた反復

例103 А Салтычиха эта была помещица *злая-презлая*…… [КРАВЦОВ 1971: 136]

「ところがこのサルティチハときたら、悪い、とんでもなく悪い女地主だったので……」(伝説)

(3) 造格語尾を用いた反復

例104 Перьяце у ворона *черным-черно*…… [ЕВГЕН'ЕВА 1963: 217]

「からすの羽は真黒に黒く……」(叙事詩)

例105 Моя квашонка *Полным-полна*…… [ЕВГЕН'ЕВА 1963: 217]

「私の桶は(こね粉で)一杯に充ちている……」(叙情歌)

4) 副詞句にあらわれる figura etymologica

(1) 接頭辞を用いた反復

例106 …… , обмолоти мне к завтраму всю пшеницу *чисто-начисто* до единого зернушка,…… [КРАВЦОВ 1971: 107]

「……, あしたまでに全部の小麦を一粒残らずすっかりきれいに脱穀するんだよ……」(民話)

例107 И *плотно-наплотно* ведь были б подпоясаны…… [КРАВЦОВ 1971: 50]

「そして固く, しっかりと(剣を)腰につけているようにと……」(泣き歌)

(2) 造格語尾を用いた反復より派生した副詞にあらわれる figura etymologica

例108 *давным-давно* скачут на борзых конях. [КРАВЦОВ 1971: 108]

「……彼らはもう長いこと, かなり前から足のはやい馬を走らせている。」(民話)

5) 前置詞句にあらわれる figura etymologica

(1) 同語根の名詞の反復によるもの

例109 На *горе-горушке* Стоят три старушки…… [КРАВЦОВ 1971: 86]

「丘の, 小さな丘の上に三人の老婆が立っている……」(謎々)(答——「大砲」)

リトアニア民謡に同様の指小形語尾を用いた語根反復が見られる。

Oi ant kalno, Oi ant kalno, ant kalnelio, Ulijana linus rovė. [BALYS 1955: 9]

「おお、丘の上で、おお、丘の上で、小さな丘の上で、ウリヤナは亜麻の根を掘っていた」

(2) 同語根の名詞と形容詞の結合によるもの

例110 По *zare zarynskoj* катится шар вертянский…… [DAL' 1880: 628]
「しのめの暁にくるくるまわる球がころがってゆく……」(謎々)(答——「太陽」)

И ко *svyatoj svyatyne* приложился он…… [KRAVCOV 1971: 215]
「そして聖なる聖物に彼はくちづけた……」(叙事詩)

例111 Походил Василий Ко своему он *dvoru dvoryanskomu*…… [KRAVCOV 1971: 211]
「ワシーリイは、やって来た、自分の貴族の屋敷へと……」(叙事詩)

例112 В *temnoj temnice* Красны девицы……[KRAVCOV 1971: 77]
「暗い牢獄に美しい娘たち……」(謎々)(答——「蜂」)

例113 Отъезжала красна девица <……> К *chuzomu chuzhe-chuzhaninu*…… [KRAVCOV 1971: 34]
「美しい娘は旅立った、見知らぬ、よその他人の家へと……」(婚礼の儀礼歌)

Ⅲ . figura etymologica の一般的機能

以上の用例の検討によって、ロシア・フォークロアにおける figura etymologica がきわめて多様な形態をとっていることが確認されたと思う。この多様性は、序論で述べたように、ロシア語における形態論的なレベルでの範列関係の多様性が、結合軸に投影されたものと解釈することができる。

一般的に範列関係の統合関係への転移という手法が、芸術構成において重要な役割をはたしていることは、序論で述べたとおりであるが、ここで figura etymologica の手法にのみ限定して考えるなら、この語法は一般的に詩的機能のみならずさらにいく

つかの機能をあわせ持っていると考えられ、検討した用例には、それらの機能がさまざまな形であらわれている。本章ではこの語法がなういくつかの機能について考える。

最初に確認しておきたいのは、日常言語と文学言語の階層的な差異である。口承文芸を含めた文学は、一般的に日常の自然言語を素材として構成されたものであり、文体論的に日常言語と区別される指標（たとえば韻律）をいくつか持っている。しかし文学言語は、日常言語とさらに意味論的に区別される。すなわち文学言語は自然言語を素材として構成されることによって、自然言語を媒介としてしか現実と相関しえない。すなわち文学言語は自然言語の上に二次的に構築された言語体系であるといえることができる。figura etymologica が日常言語にもあらわれる語法であることを考えるなら、この語法の機能もこの二つの言語体系との相関によって捉えなければならないであろう。

1. 情動的機能

語根反復の語法は、日常言語では、必然的に意味論的反復として機能する。表現の情動的強調の手段として, давным-давно「とっくの昔から」(例108), всякая всячина「一切合切」(例91)などの語法や、指小接尾辞を用いた語根反復は、日常の口語にしばしば見いだされる。花嫁の、あるいは葬礼の泣き歌に頻出する figura etymologica は、まずこの情動的機能と結びついているといえることができる。しかし、フォークロアのテキストにおいては、それらの情動的機能をになっている figura etymologica は、同時に詩的機能をもなうことになるのである。

2. 詩的機能

最初に術語の定義をおこなっておく。「詩的」という術語は、本稿では「文学的」と同義語であり、詩的機能とは、自然言語を文学作品へ構成し、組織化するための機能である。本稿では、「文学」という術語は経験論的ジャンル概念であり、文学性あるいは芸術性の定義はおこなわない。

詩的語法としての figura etymologica は、口承文芸のみならず、個人的な創作を含めた詩的言語一般に見いだされる [JAKOBSON 1953; FOKOS 1936]。

序論で述べたように、figura etymologica の中心的機能は、テキストに秩序を導入し、既成の言語要素から新しい非日常的な言語表現を創造する詩的機能であると考えられる。前節で述べたように figura etymologica の一部は、日常的にも用いられるが、そのほとんどは詩的言語にのみ見いだされる語法である。1章5節で紹介したオ

スチャーク・フォークロアの *figura etymologica* は、Steinitz によれば、日常言語では全く用いられない [STEINITZ 1976: 42]。

統辞論のレヴェルにおける「反復」の手法として *figura etymologica* は、音韻反復を文法的に動機づけるだけでなく、より上位のレヴェルの「反復」の構成のためにもしばしば機能している。次の例では、2つのタイプの *figura etymologica* (同語根の名詞の反復によるものと同語根の名詞と動詞が主述関係を結ぶもの) が、2行ずつ並行的に用いられ、統辞論的パラリズムが構成されている。この結果4つの詩行は、共に詩行末尾から2番目の音節にアクセントを持つ結果となっている。すなわちここでは *figura etymologica* は詩行のリズムの組織化のために機能している。

Под мостом-мостищем, Под городом-городищем, Две трубы
трубили, Две свечи светили. [KRAVCOV 1971: 81]

「橋の、大きな橋の下、町の、大きな町の近くに 2つのラッパが鳴りわたり、2つのろうそくが光った。」(謎々) (答一唇、齒、鼻、眼)

次の例においては、最初の詩行で、同語根の名詞と動詞が主述関係を結ぶ *figura etymologica* が反復され、第2の詩行では同語根の動詞と対格補語によって構成される *figura etymologica* が末尾にあらわれ、同じ三人称単数現在の屈折語尾によって押韻をおこなっている。

Ай, не шум шумит, не гром гремит, Молодой турцяк свой дел
делит. [ASTASHOVA 1951: 636]

「ああ、ざわめきがざわめいているのでも、どよめきがどよめいているのでもない、若いトルコ人が分前を分けているのだ。」(叙事詩)

一般的に詩的言語の体系においては、*figura etymologica* は自己目的化され、その音韻反復のための機能が前面にでてくる。たとえば既に述べたように泣き歌などのジャンルにおいて、*figura etymologica* は、情動的機能ばかりでなく、同時に詩的機能をもなうことになる。自己目的化された *figura etymologica* においては、接尾辞法によって全く新しい語が造語されることも少くない。ロシア・フォークロアにおける次の例では、二つの形容詞はこの語法のために作られた造語で、ほとんど実質的な意味を持っていない。

Три тоски тоскучие, три рыды рыдучие……[JAKOBSON 1979: 331]

「三つの哀しい憂い、三つの泣き叫ぶ号泣……」(呪文)

次に引用するクロアチア民謡は、テキストのすべてが動詞と造格補語による *figura*

etymologica によって構成されている珍しい例である。

Šibum šibovala,
 kamen kamovala,
 trnom trnovala,
 bičum bičovala,
 hižom hižovala,
 klopom klopovala,
 stenom stenovala,
 knjigom knjigovala,
 grehom grehovala,
 božom božovala,
 sinom sinovala,
 bratom bratovala,
 decom decovala,
 ocom ocovala,
 mater matovala,
 vujcem vujcevala,
 kumom kumovala,
 listom listovala,
 svetom svetovala,
 Jezuš ježuvala,
 ludem ludevala,
 nožom noževala,
 ženom ženovala,
 bratom bratovala. [Tolstoj 1971: 351-352]

この民謡の採集者は、この歌をかなり多くの農民が知っていたにもかかわらず、この歌詞の意味は誰も知らず、ただ普通放牧の時に歌われる歌である、ということしかわからなかったと記している [Tolstoj 1971: 352]。我々はこの自己目的化された *figura etymologica* の極限的な相を見ることができよう。

3. 記憶術的機能

figura etymologica の口承文芸に固有の機能としてあげられるのは記憶術的機能で

ある。語根反復は、必然的にテキストの意味論的な冗長度を増大させる結果を生むが、これは口頭におけるテキストの伝達を確実にし、その記憶を容易にする。一般的にスローガンやコマーシャルに音韻反復や意味論的反復が多くあらわれるのは、「反復」の手法が一般的に持つこの記憶術的機能に由来すると考えられる。Gonda は Veda における *figura etymologica* および音韻反復一般の持つ記憶術的機能を指摘している [GONDA 1959: 188]。また初期ラテン作家の文献に見いだされる *figura etymologica* の多くが、法、政治、軍事などにかかわる慣用句であることは示唆的である [GONDA 1959: 275]。ただし口承文芸における *figura etymologica* の機能は、この記憶術的機能のみには還元できない。Mounin は、Jakobson のパラレリズム論を批判して、口承文芸におけるパラレリズムは、単なる記憶術的構造にすぎない、としているが [MOUNIN 1972: 150]、一般的に反復の手法が持つ詩的機能と記憶術的機能はおそらく矛盾するものではない。たとえば諺などのジャンルでは、この二つの機能は、ほぼ拮抗していると考えられる。問題は、同一の語法も異なる言語体系、異なるジャンルにおいては、その機能を変化させる、という点にある。

4. 呪術的機能

figura etymologica は、既に用例で見てきたように、呪文などの儀礼的テキストにもしばしばあらわれる語法であり、その場合、この語法は詩的機能、記憶術的機能のほかに呪術的機能を持っていると考えられる。これはすなわち語根の反復という言語行為にいわば神秘的呪力を付与しようとするもので、儀礼の操作対象への一種の情動的機能と考えることができる [JAKOBSON 1960]。

このタイプの *figura etymologica* の機能は、ヴェーダに典型的にあらわれている。リグ・ヴェーダから例をひこう。

yajñēna yajñām ava yajñiyah śan (III, 32, 12)

「犠牲によって犠牲に力を与えよ、汝、犠牲にふさわしき者は」

hīranyarūpaḥ śa hīranyasamḍṛg | apām nāpāt śéd u hīranyavarṇaḥ | hīranyáyāt pári yóner niśádyā | hīranyadā́ dadaty ánnam asmai || (II, 35, 10)

「黄金の如き姿の彼は黄金の顔容かんばせを持ち、まさにこのアパーム・ナパートこそは黄金色なり。黄金の胎から（出て）座を占める時、黄金の授与者たちは、彼に栄養を与える。」

ヴェーダにおいて反復される語根は、当該の讃歌において最も重要な概念をあらわ

すものであることが多いが [ELIZARENKOVA 1972: 76], このような *figura etymologica* の呪術的機能は、口承文芸の中でも儀礼的テキストにのみ見られるものである。

5. *figura etymologica* の諸機能とジャンル

以上検討してきたように、*figura etymologica* がなう諸機能は、この語法が実際に用いられる言語体系およびジャンルによって規定される。従ってたとえばあるフォークロアのテキストが儀礼的ジャンルから非儀礼的ジャンルへと移行した場合（たとえば、わらべ唄に退化した儀礼歌）、この語法が中心的になう機能は、呪術的なものから詩的なものへと移行するであろうし、フォークロアの言語から日常言語に浸透した *figura etymologica* においては、詩的機能よりも情動的機能がドミナントとなるであろう。従って本稿でその用例を検討してきた *figura etymologica* も、それがなう機能は、最終的にはそれぞれのジャンル、コンテキストによって決定されると考えるべきである。

Ⅳ. 結 論

以上で *figura etymologica* の形式と機能の分析を終える。この分析を通じて明らかになったのは、この手法は言語の系統を問わずあらわれるが、ロシア・フォークロアにおける *figura etymologica* は、その多様性において際だっている、ということである。この事実は、フォークロアの他のレベルにおける反復の手法と比較して考えるなら、範列—統合関係の転換という原理の普遍性と、ロシア語という言語の特殊性を同時にさしめすものといえる。すなわちロシア・フォークロアにおける手法としての *figura etymologica* の生産性の高さは、Jakobson の指摘するように [JAKOBSON 1953, 1966, 1968], ロシア語の屈折性の強さと接辞の生産性の高さにその原因があるといえよう。つまりロシア語ではある語彙に対して選択軸上にあらわれる同語根の派生語の数がきわめて多い。このために範列—統合関係の転換という原理の実現に際して、そこには必然的に形態論的・造語論的レベルでのロシア語の範列関係の多様性が投影される結果になるのである。既に述べたように、わが国の「かけことば」の技法も、同音異義語の多い日本語においては、統合関係に投影すべき範列性として同音異義性が優先的に用いられたものと解釈できよう。

こうして本稿で検討したロシア・フォークロアにおける *figura etymologica* は、

範列—統合関係の転換という原理に支えられた言語的な器用仕事（ブリコラージュ）の個別的な具体化として位置づけられるのである。

文 献

- AFANAS'EV, A. (Афанасьев, А.)
1913a *Русские народные сказки* Т.1. Москва.
1913b *Русские народные сказки* Т.2. Москва.
1913c *Русские народные сказки* Т.3. Москва.
1913d *Русские народные сказки* Т.4. Москва.
1914 *Русские народные сказки* Т.5. Москва.
- ASTASHOVA, A. (Астахова, А.)
1951 *Былины Севера, 2*, Москва-Ленинград.
- AUSTERLITZ, R.
1958 "Ob-Ugric metrics", *FF communications*, No. 174: 1-128.
- BALYS, J.
1955 *Lithuanian folk songs in the United States*. (annotation to the record "Lithuanian folk songs in the United States", Folkways Record). New York.
- BARTAŠEVICĖ, G. A., SALAVEJ, L. M. (Барташэвіч, Г.А., Салавей, Л.М.) (ed.)
1980 *Валачобныя песні*, Мінск.
- BLACKING, John
1973 *How musical is man?* University of Washington Press.
- BOGATYREV, P. (Богатырев, П.) (ed.)
1966 *Русское народное творчество*. Москва.
- CIŠČANKI, I. K. (Цішчанкі, І.К.) (ed.)
1978 *Беларуская народная творчасць. Песні пра каханне*. Мінск.
- ČIURLIONYTĖ, J.
1955 *Lietuvių liaudies dainos*, Vilnius.
- ČIŽEVSKA, T.
1966 *Glossary of the Igor' Tale*, The Hague: Mouton.
- DAL', V. (Даль, В.)
1862 *Пословицы русского народа*, Москва.
1880 *Толковый словарь живого великорусского языка*, Т.1, Москва.
1881 *Толковый словарь живого великорусского языка*, Т.2, Москва.
1882 *Толковый словарь живого великорусского языка*, Т.3, Москва.
1883 *Толковый словарь живого великорусского языка*, Т.4, Москва.
- ELIZARENKOVA, T. Ja. (Елизаренкова, Т.Я.)
1972 Древнейший памятник индийской культуры, in *Ригведа, Избранные гимны*. Москва.
- ENDZELĪNS, J.
1951 *Latviešu valodas gramatika*, Rīgā.
- EVGEN'EVA, A. (Евгеньева, А.)
1963 *Очерки по языку русской устной поэзии в записях XVII-XX вв.* Ленинград.
- FASMER, Max (Фасмер, М.)
1964 *Этимологический словарь русского языка* Т.1. Москва.
1967 *Этимологический словарь русского языка* Т.2. Москва.
1971 *Этимологический словарь русского языка* Т.3. Москва.

- 1973 *Этимологический словарь русского языка* Т.4. Москва.
- FOKOS, D.
1932 Die etymologischen Figuren der finnisch-ungarischen Sprachen, *Ungarische Jahrbucher* 12: 70-89.
- GONDA, J.
1959 *Stylistic repetition in the Veda*, Amsterdam.
- 伊東一郎
1977 「ロシア・フォークロアにおける類義語反復について」『ロシア語ロシア文学研究』9: 14-25.
1979 「ロシア民謡詩における指小接尾辞の韻律的機能」『早稲田大学語学教育研究所紀要』19: 1-6.
1980 「ロシア・フォークロアの言語と詩学」千野栄一編『言語の芸術』（講座言語，第4巻）大修館書店，pp. 181-214.
- IVANOV, A. (Иванов, А.)
1953 *Русские песни, 1, Старинные народные песни*, Ленинград.
- IVANOV, V. V. (Иванов, В. В.)
1969 Использование для этимологических исследований сочетаний однокоренных слов в поэзии на древних индоевропейских языках, *Этимология* 1967: 40-56.
- ЯКОВСОН, R. (Якобсон, Р.)
1979 Новейшая русская поэзия: Подступы к Хлебникову [1921] (Second edition) in Roman Jakobson, *Selected Writings* 5, The Hague: Mouton, pp. 299-354.
1923 *О чешском стихе преимущественно в сопоставлении с русским*, Берлин-Москва.
1953 The kernel of comparative Slavic Literature, *Harvard Slavic Studies* 1: 1-71.
1960 Linguistics and Poetics, in T. A. Sebeok (ed.), *Style in Language*, Cambridge, Mass.: M.I.T. Press, pp. 350-77.
1966 Grammatical Parallelism and its Russian facet, *Language* 42: 398-429.
1968 Poetry of Grammar and Grammar of Poetry, *Lingua* 21: 597-609.
- JANSONS, J. A. (ed.)
1970 *Latviešu dzejas antologija, 1*, Rīgā.
- 高津春繁
1954 『印欧語比較文法』岩波書店。
1960 『ギリシャ語文法』岩波書店。
- KRAVCOV, N. (Кравцов, Н.)
1971 *Русское народное поэтическое творчество, Хрестоматия*, Москва.
1976 *Славянский Фольклор*, Издательство Московского университета.
- LAGERCRANTZ, E.
1963 *Lappische Volksdichtung, 5, Texte aus den see-, nord-, west- und südlappischen Dialekten*, Helsinki.
- LEROI-GOURHAN, Andre
1964 *Le geste et la parole, vol. 1, technique et langage*, Paris: Albin Michel.
- LÉVI-STRAUSS
1958 *Anthropologie structurale*, Paris: Plon.
1960 L'analyse morphologique des contes russes, *International Journal of Slavic Linguistics and Poetics* 3: 122-149.
1962 *La pensée sauvage*, Paris: Plon.
- LORD, A. V.
1960 *The Singer of Tales*, Cambridge, Mass.
- МАКСИМОВИЧ, М. (Максимович, М.)
1834 *Украинские народные песни*, Москва.

- MIKLOŠIĆ, F. (Миклошич, Ф.)
1895 *Изобразительные средства славянского эпоса*, Москва.
門馬直衛 (編)
1959 『世界民謡全集 8, ロシア篇』音楽之友社。
- MOUNIN, George
1972 *La linguistique du XX^e siècle*, Presses Universitaires de France.
- OSSOVECKIJ, I. (Оссовецкий, И.)
1957 *Стилистические функции некоторых суффиксов имен существительных в русской народной лирической песне*, *Труды института языкознания АН СССР*, 7, Москва.
- PRAVDJUKA, O. (Правдюка, О.)
1964 *Пісні великого Кобзаря*, Київ.
- PROPP, V. (Пропп, В.)
1928 *Морфология сказки*, Ленинград.
1957 *Народные русские сказки А.Н. Афанасьева*, Т.1-3, Москва.
1961 *Народные лирические песни*. Ленинград.
- RANGE, J.
1976 Sprachlich-stilistische Untersuchung zur 'Figura etymologica' in den litauischen Dainos, *Baltistica* 12(2): 176-187.
1977 Sprachlich-stilistische Untersuchung zur 'Figura etymologica' in den litauischen Dainos, *Baltistica* 13(1): 281-296.
- ROMANSKA, C. (Романска, Ц.)
1963 *Славянски Фолклор. Очерки и образци*. София.
- RUWET, N.
1972 Quelques remarques sur le rôle de la répétition dans la syntaxe musicale, in Ruwet, N., *Langage, musique, poésie*, Paris.
- RYBNIKOV, P. N. (Рыбников, П.Н.)
1910 *Песни, собранные П.Н. Рыбниковым*, Т.3, Москва.
- ŠKLOVSKIJ, V. (Шкловский, В.)
1919a О поэзии и заумном языке, *Поэтика, Сборники по теории поэтического языка*. Петроград. pp.13-26.
1919b Связь приемов сюжетосложения с общими приемами стиля, *Поэтика, Сборники по теории поэтического языка*. Петроград, pp.115-150.
- SREZNEVSKIJ, I. I. (Срезневский, И.И.)
1893 *Материалы для словаря древне-русского, языка*, Т.1. Санкт-Петербург.
1902 *Материалы для словаря древне-русского, языка*, Т.2. Санкт-Петербург.
1906 *Материалы для словаря древне-русского, языка*, Т.3. Санкт-Петербург.
- STEINITZ, W.
1976 *Ostjakologische Arbeiten, B. II, Ostjakische Volksdichtung und Erzählungen aus zwei Dialekten: Kommentare*, The Hague: Mouton.
- TOLSTOJ, N. I. (Толстой, Н.И.)
1971 Из поэтики русских и сербохорватских народных песен (Прилагательный творительный тавтологический) in Алексеев, М.П. (ред.), *Поэтика и стилистика русской литературы*. Ленинград, pp. 348-354.
- ТОПОРОВ, V. N. (Топоров, В.Н.)
1969 К реконструкции индоевропейского ритуала и ритуально-поэтических формул. (На материале заговоров), *Труды по знаковым системам*, 4. Тарту, pp. 9-43.
- 辻直四郎
1974 『サンスクリット文法』岩波書店。

Vovčok, M. (Вовчок, М.)

1979 *Народні пісні в записах Марка Вовчка*. Київ.

Žukov, V. P. (Жуков, В.П.)

1966 *Словарь русских пословиц и поговорок*. Москва.